

---

# 熟れすぎた林檎～真実の実をもつ人魚姫～

美奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

熟れすぎた林檎〜真実の実をもつ人魚姫〜

### 【Nコード】

N0222A

### 【作者名】

美奈

### 【あらすじ】

現在、準備中

## プロローグ1 声を失った人魚姫

君は傘もささずに雨の中、立っていた。

ただ熟れた林檎を大切そうに持っていた。

そして・・・泣いていた。

少し・・・微笑みながら・・・。

そして俺は問いかけた。

その林檎は何・・・？

何故泣いているの・・・？

でも君は答えなかった。

代わりに・・・

林檎を二本の指だけで持ち、口元に悲しげな笑みを浮かべた。

そして・・・

人差し指を一本・・・口の前に・・・立てた。

まるで・・・

歌声と引き換えに人間になった・・・恋する人魚姫のように・・・

俺はそのとき君が大事そうに持っていた林檎を落とすようにも持ち替えた意味がわからなかった。

君の涙のわけが・・・

その悲しげな笑みの意味が・・・

わからなかった。

そして最後に・・・

軽く唇が触れるだけのキスをし・・・

一言残し、

君は・・・

消えた・・・。

いつか私を解き放って・・・ね・・・？

まるで・・・

魔法が・・・

呪縛が解けて・・・

泡にとなった・・・

人魚姫のように・・・

そして今・・・

その意味が・・・

その真実が・・・

解き放たれる・・・時が・・・きた・・・。

約束のときが・・・来た。



## プロローグ2 熟れすぎた林檎の理由（わけ）

私は貴方の帰りをずっと雨の中待っていた

傘も差さずに・・・

貴方はそんな私を見たときたん驚いてたね。

でも私は動じなかった・・・

時間が・・・ない・・・から・・・

私は貴方に想いを2つ・・・伝えた・・・

一つは熟れた林檎を両手で大事に持って・・・伝えた

でも貴方には伝わらなかった・・・

もう時間がないから・・・

一つでも伝えようとした

二つ目は熟れた林檎を落とすかのように持った・・・そして伝えた

でも貴方には届かなかった・・・

二つとも伝わらなかった・・・

届かなかった・・・

私は、もう一度二つの想いをこめて・・・

軽く・・・キスをした。

ねえ、わかるかしら？

貴方をずっと待っているから・・・

冷たい海の底で待っているから・・・

この林檎は、

熟れすぎてしまっているのよ………？

貴方を待てば待つほど……

逢えたときの喜びが大きいから………

だから私は待ち続けているの・・・

だから林檎も熟れすぎてしまうのよ・・・？

貴方は、どちらが好き？

熟れすぎているほう？

どちらでもいいわ・・・。

熟れたものは戻らない・・・

時は戻らない・・・

いつか一緒に居られなかった時を補えるときがくるから……

だから私は待ち続ける……

プロローグ2 熟れすぎた林檎の理由(わけ) (後書き)

作者から

次からいよいよ本題です。

最後までいっても内容がわからないかもしれません。。。

## 第一章 幻想の中で幻想(ゆめ)を見る僕ら

いつか私を解き放って・・・ね・・・？

「ん・・・？」

今、一人の少年が起きた。

二人の間を持つ子供。

工藤新一こと、江戸川コナンだ。

「・・・んだ？今の・・・」

少年は夢を見た。

とてもとても不思議な夢。

「蘭・・・？んなわけないか・・・」

一人の少女と一人の少年・・・

二人は“運命”というもので結ばれている・・・

が・・・小さい名探偵でもその“運命”にはかなわない・・・

ほら・・・

彼女が呼んでる・・・



偽りの自分を・・・

「コナン君？」「飯よ？」

「あっ今行くよ。」

「やっぱり・・・夢？」

いつも夢を見る。

毎回毎回同じ夢。

いつもいつも悲しげな微笑み残し消える彼女・・・

そして、いつもいつもそれを見ていることしか出来ない彼・・・

何回も・・・

呪縛が解けるまで・・・

同じ夢穗見る・・・

多分、彼女も・・・

彼に手が届かず消えてしまう・・・

もうあの夢は見たくない・・・と・・・

もう夜が来なければ楽なのに・・・と・・・

願う。

そんなときに見る月が切なくて・・・

眩しくて・・・

目を閉じてしまう・・・

それは勇気がない証・・・

だから僕らは探し続ける・・・

進み続ける・・・

本当の“勇気”が・・・

本当の“希望”が・・・

本当の“願い”が・・・

見つかるまで・・・

そしていつか解き放ってあげる・・・

呪文を見つけて・・・

だから今はまだ・・・

待ってて・・・

第一章 幻想の中で幻想（ゆめ）を見る僕ら（後書き）

作者から

ぜんぜんわかんないですね……。

で、でもそのうちわかります……多分。

第二章 貴方は“赤い糸”を信じますか？ 貴方は“運命の糸”を信じますか？

彼女は、悲しげな微笑を残し、消える。

「・・・ん？」

今、一人の少女が誰よりも早く起きた。

一途で、純粋な少女・・・

毛利蘭だ。

「・・・新一？」

彼女もまた夢を見た・・・

長い長い夢を・・・

同じ夢を・・・

「・・・なわけないか。」

一人の少女が消える夢・・・

一人の少年に想いを託して・・・

消える夢・・・

想いは届かず消える夢・・・

何度その夢に涙しただろう。

何度その意味に悩んだことだろう。

でも確かに見えたのは・・・

キラッと光った、一筋の・・・

赤い糸・・・

運命の糸・・・

「・・・あれは見間違い・・・？」

本当にそう思う・・・？



「うん……。まっいつか。」

もう一人の自分の声に気がつかなかった。

願いを託した、自分の声に気がつかなかった。

叫んでいるのに届かない声。

呼んでいるのに気づかない心。

願っているのに伝わらない想い。

どれもこれももどかしいモノ。

いつになったら呪縛は解ける？

いつになったら“勇氣”という純粋なものに逢える？

いつになったら・・・

貴方に逢える・・・？

**第二章 貴方は“赤い糸”を信じますか？ 貴方は“運命の糸”を信じますか？**

作者から

まだまだ語りばかりですね・・・。

いつになったら始まるのでしょうか？

### 第三章 時を戻すチカラ

「おはよお・・・蘭ねえちゃん。」

「おはよー！早く食べてね。」

「うん。」

「らあん・・・ご飯。。。」

「もう！お父さん、ご飯くらい自分でよそってよー！」

こんな何気ない日常に・・・

昔は憧れていた・・・

人魚姫・・・

その願いは叶わず・・・

その人魚は消えた・・・

何故だろう？

こんな日常に憧れながらも、恐れていた自分。

これ以上望むと、何か壊れそうな気がして……

何かが消えてしまいそうな気がして……

なにか大切な声<sup>たからもの</sup>を失いそうで……怖く……て……。

でもそれは後から押し寄せて来る、ただの“後悔”にすぎなかった。

だから・・・

今は後悔しないように・・・

一歩一歩、大切に歩いてゆくわ・・・

時は戻らない・・・・・・・・・・のではないの・・・  
戻せない・・・・・・・・・・のではないの・・・

戻さないの・・・・・・・・・・。

戻すだけの勇気が、チカラがないの・・・。

そっでしよう？

弱虫な・・・だけ。

“不安”という名の弱虫。



### 第三章 時を戻すチカラ（後書き）

作者から

ううん・・・何か違う・・・何か・・・。

このお話はありえないことがたくさん出てきます。





いや、それは当たり前のことなのだが……

真剣に……

これもいつもと一緒に……

優しい表情で、読んでいた。

懐かしむような……

幼き日を思い出すような……

そんな感じだった。

夕日に照らされた顔が……

今にもその横顔が壊れそうで……

声が掛けられなかった。

そして、満足したかのようにふと顔をあげ、

「あれ？灰原いつからいたんだ？」

「…わからない。」  
「はあ？」

そう…

時間もわからぬほど、彼を見つめていたから…  
時計を見ると、

「二十分ぐらい前から…」

「はあ?! 声掛けてくれりゃよかったのに。」

「あまりにも…」

貴方の横顔が綺麗だったから……

「貴方が真剣だったから……」

「そうか？」

本当の事は言わない……

そんなこと口が裂けても言えないわ……

絶対からかわれるだけ……

秘密はヒミツのまま……

「貴方、何読んでたの？」

「俺? これ。」

“ M e r m a i d ’ s t e a r s ”

「 M e r m a i d ’ s t e a r s ? … 人魚の涙? 」

「 ああ。 」

「 どんなお話なの? 」

「 お前も読むか? 」

「 いいの? 」

「 読書感想文に使うから一応俺名義だが、借りとけ。 そうだな三日後、学校で俺に返してくれればいいよ。 」

「 そんなに借りていていいの? 」

「 ああ! 」

「 ありがとう…。 」

“ M e r m a i d ’ s t e a r s ”

昔々あるところに、一人の人魚がいた。

その人魚は毎日毎日泣いていた。

誰が問いかけてもかえってくる答えは一緒。

好きな人に会えないから・・・

想いが伝えられないから・・・

そこへ、一人の意地の悪い魔女が意地の悪い微笑を浮かべながら降り立った。

そして、

「お前は好きな人間に、2つだけ、想いを伝えておいで。一つでも伝わったら、お前を人間にしてあげる。もしできなかつたら・・・」

お前を封印するよ・・・

そして人魚と魔女は契約をした。  
ただ逢いたいがためだけに…  
ただ想いを伝えたいがためだけに…

そして想いは二つとも届かず、人魚は泡になるように消えた。  
封印された。

1つの熟れすぎてしまった林檎を持って・・・

そして今でもその人魚は待っている。

一人の人魚が封印されたことで、1つの言い伝えができた。

その人魚の封印が解かれるとき、幸福なときがおとずれぬであらう。

第四章 Mermaid's tears \ sadness (後書き)

作者から

実際に、Mermaid's tears という物語はありま  
せん。私の知っている限りでは。。。

もしそんなお話があるのなら、教えてください、本当に。読みたい  
です!! (笑)

Mermaid's tears \ sadness というの

は、訳すと、

人魚の涙 \ 悲しみ

という意味です。

ご参考に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0222a/>

---

熟れすぎた林檎～真実の実をもつ人魚姫～

2010年10月10日06時32分発行